

令和3年度全国学力・学習状況調査 結果の概要

女川町立女川小学校

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準を維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 改善の取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2 調査実施月日 令和3年5月27日(木)

3 対象学年 女川小学校第6学年児童35名 当日実施児童33名 後日実施児童2名

4 調査事項及び内容

- (1) 教科に関する調査：国語，算数
- (2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

5 本校と県・全国との比較

	国語	算数
宮城県	同程度の数値である。(≒)	若干下回っている(▼)
全国	若干下回っている(▼)	下回っている(▼)

6 学力調査結果から

(1) 国語の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・「知識及び技能」が宮城県、全国平均と比較して上回っている。漢字に関しては、新出漢字を反復して学習することで定着が図られている。これは、単元の初めに、全員で新出漢字の音読み・訓読み・例文の音読を行い、ドリルを何度も使って学習することが成果につながっていると考えられる。

また、分からない言葉をすぐに辞書で調べるようにしていることも、言葉の意味理解に結びついたと考えられる。

(課題)

- ・「思考力、判断力、表現力等」では、「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」の内容は宮城県平均を超えているが、全国平均には届かない。また、「C読むこと」においては、宮城県・全国平均ともに大きく下回っている。
- ・問題形式においては「記述式」の問題が、全国の正答率と比較して課題が見られる。

②指導改善のポイント

- ・「知識及び技能」における漢字指導については、これまで通り反復して取り組むことを継続する。また、主述の関係や修飾語など指導についても、日々の指導において繰り返し取り組ませる。

- ・「読むこと」では、目的に応じて、文章と図表とを結びつけ必要な情報を見付けたり、目的を意識して中心となる語や文を見付けて要約したりすることに課題が見られることから、以下の力を養う指導を工夫する。

- 1) 設問を正しく読み取る力
- 2) 設問に合う情報を本文から抜き出す力
- 3) 本文から抜き出した情報を文章にまとめる力

また、日頃の学習の書く活動においてもこれらの力を意識し、指導にあたる必要がある。具体的には、学習の振り返りを行う際に本時の学習のキーワードを与え、文章にまとめさせたり、国語科や社会科の学習で必要な情報がどこに書いているのか探し、抜き出させたりすることについて指導を積み重ねていく必要がある。

③質問紙から

- 「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業改善について

- ・質問紙では、言葉の特徴や使い方について理解したり、使ったりしている児童が約9割程度見られる。平均正答率からも多くの児童が基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けていることが伺える。これまで実践してきたように漢字や言葉、言葉の使い方については、定期的に振り返るなど継続した指導を行っていく。

- 「活用する力」の育成を図る授業の充実について

- ・「目的に応じて文章を読み、感想や考えをもったり、自分の考えを広げたりしていますか。」という質問では、8割以上の児童が肯定的な回答をしている。しかし、平均正答率を見ると児童の意識と乖離が見られる。日々の授業において、文章の叙述を基に、自分の考えをもったり、友達と考えを交える機会を設けたりすることにより、考えを広め深める授業を展開していく必要である。

- 学習に対する興味・関心等について

- ・国語の学習について、約7割近くの児童が「好き」「どちらかという好き」というように肯定的な回答をしている。また、9割以上の児童が国語の学習が大切であると感じていることが分かる。この差の要因は、国語の学習において児童が「できた」という満足感を十分に得られていないことであると推定される。そのため、今後、各単元に明記されている「言葉の力」を意識した指導を行うとともに、単元末の振り返りの活動を充実させることにより、本単元においてどのような力が身に付いたか、どのようにして身に付いたかについて確認する場を設定する。

(2) 算数の成果・課題と指導改善のポイント

- ①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・全問正解の児童の割合が、全国値をやや上回っている。
- ・「測定」の領域の平均正答率は、全国平均をやや上回っている。問題文から時刻などの条件に合う数値を選び、答えを求める力が身に付いていると言える。問題文の条件や求めるものに印を付けて読むことを習慣付けてきた成果と考えられる。

(課題)

- ・「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」とともに県平均、全国平均ともに下回っている。特に「思考力、判断力、表現力等」については、全国平均と比べると大きな開きが見られる。
- ・「変化と関係」の領域の平均正答率は、全国平均と比べると大きな開きが見られる。速さなど、単位量当たりの大きさの意味や表し方についての知識・理解の定着が不十分であったと考えられる。
- ・「データの活用」の領域の平均正答率は、全国平均と比べると大きな開きが見られる。棒グラフの読み取りはよくできていたが、帯グラフに示された複数のデータを比較して考察する問題が、全体の中でも特に正答率が低かった。
- ・「図形」の領域の三角形や平行四辺形の面積を求める問題の正答率が最も低く、重点的に指導する必要がある。
- ・記述式の問題に記入はしているが、正答率は芳しいものではない。既習事項を使って考えを説明する力に課題が見られる。

②指導改善のポイント

- ・「変化と関係」の領域については、異種の二つの量の割合として捉えられる数量を用いて、目的に応じてその大きさを比べ、表現できるようにすることが大切である。そのため、日常生活の問題を解決することを通して、速さなど、単位量当たりの大きさについて理解したり、どちらが速いかを判断したりできるようにしていく。
- ・「データの活用」の領域では、「問題、計画、データ、分析、結論」という段階を経て問題を解く統計的な問題解決に取り組ませる必要がある。児童の興味・関心や問題意識をもとにした日常生活の問題を解決するような数学的活動に繰り返し取り組む。
- ・問題解決の際には、既習事項の式や数直線、図などを用いて説明する反復練習を行い、自分の考えを説明できる力を身に付けさせる。

③質問紙から

○「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業改善について

- ・質問紙から算数の授業はよくわかると感じている児童が約9割以上見られる。しかし、平均正答率を見ると十分に知識・技能が定着していないことが伺える。確実な定着を図るために、定期的に算数の用語の意味を全体で確認したり、筆算の仕方を復習したりする場を設定していく。

○「活用する力」の育成を図る授業の充実について

- ・「算数の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できないか考えますか。」という問いに対して、8割の児童が「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と回答しているにも関わらず、平均正答率には表れていない。このことから、文章で記述された場合、普段の生活とつなげることができていないと推定される。「活用する力」を高めるために、問題文を読み取る力を高めるとともに、様々なパターンの問題に触れさせることで問題に慣れさせていく。

○学習に対する興味・関心等について

- ・算数の学習が大切であると感じているにも関わらず、授業に対しては、苦手意識をもっている児童が3割以上見られる。国語と同様に学習のなかで「できた」という経験が十分ではないと考えられる。学習のなかで「できた」と感じることをできるように個に応じた支

援ができるようにしていく。

7 児童質問紙調査結果から（○成果，▲課題）

（1）生活習慣・学習習慣について

- ほぼすべての児童が朝食を毎日食べている。
- 9割程度の児童が毎日同じくらいの時刻に就寝・起床している。
- ▲携帯電話・スマートフォンやコンピューターの使い方について、家の人と約束したことを守れない児童が全体の3割以上と宮城県・全国平均より上回っている。

（2）規範意識・自己有用感について

- 9割近くの児童が将来の夢や目標をもつことができている。
- ほぼすべての児童が「いじめは、どんな理由があってもいけないことである」と理解することができている。
- ▲自分には、良いところがあると思っている児童が、5割に届かない。宮城県・全国平均と比べ、2割以上の開きが見られる。

（3）学習に対する興味・関心等について

- 9割以上の児童が国語や算数の学習が大切であると捉えている。
- 課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組もうとする児童の割合が9割近くと全国平均を上回っている。
- 土曜日や日曜日など学校が休みの日に取り組んでいる学習時間が1時間という児童の割合が5割程度見られる。宮城県・全国平均よりも1割程度多い。
- ▲学校に行くことが楽しいと感じている児童が全体の7割程度で、全国と比較してやや低い傾向にある。

8 今後の取組

（1）「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業等の改善

- ①児童が「何がわかったか」「何ができるようになったか」を実感できる学習指導の充実
 - ・宮城県教育委員会から示されている「学力の向上に向けた5つの提言」を確実に取り入れることにより、児童の自己有用感を高めたり、基礎学力の定着を図ったりする。
 - ・校内研究において教師の指導力の向上を図るとともに、児童の目指す姿の共通理解を図り、教職員が一丸となって学力の向上に取り組む。
- ②個に応じた学習指導の充実
 - ・タブレット端末やA I型学習教材（キュビナ）を活用し、繰り返し学習に取り組ませたり、下の学年にさかのぼって学習に取り組ませたりするなど、個に応じた学習を充実させる。
 - ・習熟度別学習やティーム・ティーチングを取り入れることで、配慮を要する児童の学習内容を確実に習得させる。
- ③各種検定の積極的な受験の推進
 - ・漢字検定や算数検定を児童の学力を定着させる取組に位置付け、積極的に活用していく。

(2) 学びの土台となる望ましい生活習慣・学習習慣の形成

① 基本的な生活習慣の確立

- ・生活習慣の改善を図るために「うみねこルール」（基本的な生活習慣を身に付けさせるため、児童会で定めた約束事）を全校児童で常時意識化させる。
- ・「スマイルタイム」（健康や生活習慣を確立するために、養護教諭が中心となって指導にあたる時間）を毎月設け、児童の基本的な生活習慣を確立させる。

② 自己有用感の涵養

- ・「キャリアパスポート」を活用し、自分の得意なことや夢について自己認知する機会を設けるとともに、各学校行事などにおいて児童の成長を認め、励ますことを通して、児童の自己有用感を高めていく。
- ・高学年においては、学校の中心として委員会活動や各学校行事などにおいて活躍する場を設定し、保護者、教職員、地域の方々から認められ、褒められるような機会を設ける。

③ 家庭学習習慣の定着

- ・家庭学習の課題は、授業と関連付け、予習的な課題や復習的な課題、活用的な課題など児童の実態や、単元の進捗状況などを踏まえた内容とする。
- ・家庭学習においても個に応じたものとするために、自分の興味のある内容や苦手としている内容など児童が自分で選択して取り組むことのできる課題を上学年中心に設定する。

(3) 女川中学校、女川向学館、地域との連携強化

① 中学校との連携

- ・児童の実態を把握し、中1ギャップの解消につなげるために、中学校の教諭が教科の専門性を生かし、児童に対し指導を行う乗り入れ指導を充実させる。

② 女川向学館との連携

- ・AI型学習アプリ（キュビナ）の学習履歴を共有し、児童の苦手教科や苦手分野に焦点を当てた学習支援を行う。
- ・女川町教育委員会生涯学習課で運営している「放課後楽校」において、各学年の担任と情報交換を行い、補充学習を中心とした学習支援を行う。

③ 地域人材の活用

- ・生涯学習課で作成した「女川小学校版人材バンク」や「出前授業」を活用することにより、地域の教育力を生かす。